

大納言の大別当、清水寺の行成筆の額を修復の事（古今著聞集卷七能書二九〇）

1 傍線は読解に役立つ重要語。数字は読解で意識するポイント。

古今著聞集は鎌倉時代、橘成季によって編纂された説話集。発心集、宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集、沙石集、と鎌倉時代は説話集がさかんに編集された。

大納言なる人の若公を、清水寺の法師に養はせけり。父も知らざりければ、母の沙汰にて養はせけるに、乳母、法師になして清水寺の寺僧になして、名をば大納言の大別当とぞいひける。こちなかりける名なりかし。くだんの僧、もつての外に能書を好みて、心ばかりはたしなみて、われはとぞ思ひたりける。

2 こちなしは骨が無いが原義で無骨でぶしつけという意。尚、こちたしは言痛しから来てわずらわしい意。

当寺の額は、侍従の大納言行成の書き給へるなり。年久しくなりて、文字みな消えて、像ばかり見ゆるに、この大納言の大別当、「文字のみな消

3 「もつての他」は昔も言語道断という否定的な意味。

え失せぬとき、われ修復せん」といへば、古老の寺僧等、「さしもやむごとなき人の筆跡をば、いかがたやすくとめ給はん」と、かたぶきあひければ、「いかなる聖跡重宝なりとも、あとかたなく消え失せんには、何

4 気持ちだけ、という意味だろう。いまでも謙遜の意味で使われるが、この大納言大別当にたいして否定的な表現かと思う。

の益かあらん。別してわたくしの点をも加へばこそ懼りもあらめ、かたばかりもその跡の見ゆる時、もとの文字の上を留めてあざやかになさんは、何の難かあらん。ふるき仏にも箔をばおすぞかし」などいへば、「まことにさもあり」とて許してけり。その時、額をはなちて、あらたに地彩色して、文字のうへとめてけり。

5 じぶんこそは。「自分は」と思いが上がっている様子を示す。

かかるほどに、つぎの日俄かに雷電おびただしくして、その額を雨ぞそぎて、みな墨を洗ひて、ただもとの様になしてけり。不思議の事なり。「いかなる横雨にも、かく額のぬるる事はなきに、そのうへ、たとひ雨に

6 「皆消えた」とあるが、話の筋から形(外側)だけが日焼けなどで残っていたのだろうか。

ぬれんからに、やがてすこしも元にたがはず彩色も文字も消え失すべき事は。これはただ事にあらず。おそろしきわざなり」といひて、ののしるほどに、四五日をへて、かの大納言の大別当天亡しにけるとなん。

7 たやすく「軽々しく。古老は首を傾けあって疑問視していたのだろう。現代語に近いと思われる。

問1 A、大納言の大別当の主張はどういうことか。

8 大納言大別当の主張の言葉。合理的ではある。

問2 B、ただごとではないというのはどういう現象があったために言っているのか。

9 ようぼう、天寿を全うしないで死ぬこと。  
10 この話は大納言大別当にバチが当たった怪談のように読めるが、考えてみれば、改革派である大別当に保守派が抵抗、雨で消えるのはおかしいから、雨に乗じて額を拭き取り、改革派を毒殺して、それを正当化する話を作ったのかもしれないぞ。